

### 3. 経営成績及び財政状態

#### (1) 当中間期業績等の概況

##### 一業績の状況

当中間期の一般用医薬品事業は、市場全体は前年並みに推移しましたが、当社グループの主力品であるドリンク剤市場で縮小傾向が続くなど、依然として厳しい事業環境におかれました。

一方、医療用医薬品事業は薬価引き下げがなく、市場は堅調に推移しました。

当社グループはこのような状況下、新製品の投入や販売体制の強化などに努めてまいりましたが、連結売上高は **1,343 億 2 千万円** 余（前中間連結会計期間比△60 億 4 千 6 百万円余、4.3%減—以下括弧内文言「前中間連結会計期間比」省略）となりました。

事業部門別の売上高は次の通りであります。

セルフメディケーション事業	869 億円余	(△ 74 億円余、 7.9%減)
内訳		
一般用医薬品等	820 億円余	(△ 68 億円余、 7.7%減)
特定保健用食品等	35 〃	(△ 3 〃、 8.9%減)
その他	12 〃	(△ 2 〃、 15.2%減)
<hr/>		
医薬事業	474 億円余	( 13 億円余、 3.0%増)
内訳		
医療用医薬品	398 億円余	( 8 億円余、 2.1%増)
その他	50 〃	( 3 〃、 7.7%増)
工業所有権等使用料収益	24 〃	( 2 〃、 9.5%増)

#### セルフメディケーション事業

##### <一般用医薬品等>

ドリンク剤の「リポビタミンシリーズ」は、主力の「リポビタミン D」が第 1 四半期の遅れを取り戻し回復基調となり、また「リポビタミン D スーパー」の医薬部外品化による販路の拡大、新製品「リポビタミンウインズエース」などが貢献しましたが、その他のシリーズ品が振るわず、シリーズ全体では **512 億円余 (4.6%減)** でした。風邪薬「パブロンシリーズ」は、第 1 四半期では花粉症関連製品が好調だったものの、第 2 四半期より原料の需給逼迫による生産の遅れなどにより **92 億円余 (20.6%減)** となりました。壮年性脱毛症における発毛剤「リアップシリーズ」は、昨年度末に発売した日本初の女性用発毛剤「リアップレディ」の市場への浸透が見込みより遅れていることなどにより、**59 億円余 (6.3%減)** でした。その他のシリーズでは痔疾用薬「プリザシリーズ」は健闘しましたが、便秘薬「コーラックシリーズ」は減少となりました。

##### <特定保健用食品等>

「リビタシリーズ」は「グルコケア」（ペットボトル）が寄与しましたが、その他製品が振るわず国内売り上げは **15 億円 (13.0%減)** となりました。また、海外におけるドリンク剤の売り上げは **20 億円余 (5.7%減)** でした。

##### <その他>

ホテル事業等を行う子会社売り上げ 5 億円余を含めています。

## 医薬事業

### <医療用医薬品>

大正富山医薬品の営業活動が見込み通り進捗しており、当社の主力品「クラリス」、「パルクス注」がそれぞれ **119 億円余 (5.0%増)**、**63 億円余 (0.2%減)** になり、富山化学工業の製品である「ペントシリン」「オゼックス」「パシル」なども計画通りの推移となっております。

### <その他>

アボットジャパン社向け中間製品の売り上げが好調に推移し、**50 億円余 (7.7%増)** となりました。

### <工業所有権等使用料収益>

アボット社（米国）からのロイヤリティに加え、新規糖尿病薬の導出による契約一時金収益があり、**24 億余 (9.5%増)** となりました。

## 利益面

利益面では、広告宣伝費などを中心にコスト面の見直しを進めましたが、経常利益は、263 億円余（△77 億円余、22.8%減）、中間純利益は155 億円余（△52 億円余、25.1%減）にとどまりました。

### 一財政状態の状況

当中間連結会計期間末の総資産は、前連結会計期間末に比べ 109 億円余増加し、6,247 億円余となりました。有形固定資産は12 億円余の増加、投資その他資産は、債券の購入などによる投資有価証券の増加により 428 億円余増加しました。

一方、流動資産は、現金及び預金が 276 億円余減少、有価証券が 59 億円余減少したことなどにより 318 億円余減少しました。株主資本は自己株式の消却などにより利益剰余金が 121 億円余減少しましたが、資本控除項目である自己株式が 197 億円余減少したことにより 183 億円余増加し、5,359 億円余となりました。

### 一連結キャッシュ・フローの状況

当中間連結会計期間末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は **606 億円余** で、前連結会計期間末に比べ、**169 億円余減少** 致しました。

#### （営業活動のキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は、**154 億円余** で前中間連結会計期間に比べ **44 億円余減少** しました。税金等調整前中間純利益が **78 億円余減少** したほか、退職給付制度変更に伴う拠出額が **76 億円余** ありました。一方、法人税等の支払額は **98 億円余** と **49 億円余減少** したほか、売上債権の増減額が **35 億円余** 増加しています。減価償却費は **62 億円余**、減損損失は **2 億円余** ありました。

#### （投資活動のキャッシュ・フロー）

投資活動の結果使用した資金は、**248 億円余** で前中間連結会計期間に比べ **28 億円余増加** しました。投資有価証券の取得による支出に **386 億円余**、有形固定資産の取得による支出に **66 億円余** 使用しました。一方、有価証券の売却及び償還による収入が **95 億円余**、定期預金の解約に伴う収入が **107 億円余** ありました。

#### （財務活動のキャッシュ・フロー）

財務活動の結果使用した資金は、**76 億円余** で前中間連結会計期間に比べ **70 億円余減少** しました。支払の主な内容は、配当金の支払 **77 億円余** ですが、前中間連結会計期間との比較では、自己株式の取得による支出が **73 億円余減少** しています。

## キャッシュ・フロー指標のトレンド

	平成 16 年 3 月期	平成 17 年 3 月期		平成 18 年 3 月期
	期末	中間	期末	中間
株主資本比率 (%)	83.2	83.5	84.3	85.8
時価ベースの株主資本比率 (%)	104.6	104.7	114.5	100.9
債務償還年数 (年)	0.0	0.0	0.0	0.0
インタレスト・カバレッジ・レシオ	11,505.8	9,918.0	10,794.8	7,702.0

(注) 株主資本比率：株主資本／総資産

時価ベースの株主資本比率：株式時価総額／総資産

債務償還年数：有利子負債／営業キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：営業キャッシュ・フロー／利払い

\*各指標は、いずれも連結ベースの財務数値により計算しております。

\*株式時価総額は、期末株価終値×期末発行済株式数（自己株式控除後）により算出しております。

\*営業キャッシュ・フローは連結キャッシュ・フロー計算書の営業活動によるキャッシュ・フローを使用しております。

有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っているすべての負債を対象としております。

また、利払いについては、連結キャッシュ・フロー計算書の利息の支払額を使用しております。

## (2) 通期の見通し

### セルフメディケーション事業

一般用医薬品等の通期売り上げは **1,640 億円（4.9%減）** を予定しています。

ドリンク剤につきましては、下期に **100ml** の新製品が複数予定されています。また、従来から行ってきた、地域型キャンペーンなどのマーケティング活動を通じ、ドリンク剤新規ユーザーの開拓、飲用本数の増加に努めていきます。「パブロンシリーズ」については、原料の需給逼迫による生産の遅れがでている製品から他の主力製品へのシフトを促進するとともに、花粉症関連の新製品の寄与も見込まれることから、下期については前年並みの売り上げを計画しています。「リアップシリーズ」につきましては、引き続き、女性用「リアップレディ」の顧客開拓を行うとともに、男性用の新規ユーザーの掘り起こしを行います。

特定保健用食品等については、**80 億円（2.0%増）** を予定しています。

リビタシリーズは、第 4 四半期に新製品数品目を予定しており、これらの寄与が見込まれます。海外ドリンク剤につきましては、前年並みを計画しています。

### 医薬事業

医療用医薬品の通期売り上げは前年比微増の **820 億円** を予定しています。

医療用医薬品売り上げは、上半期に引き続き、大正富山医薬品の活動が計画通りに推移すると見込んでおり、「クラリス」、「パルクス注」の通期売り上げはそれぞれ **283 億円**、**122 億円** を計画しています。また、富山化学工業の製品である「ペントシリン」「オゼックス」はそれぞれ **69 億円**、**36 億円** です。

その他製品の売り上げにつきましては、前年比微増の **98 億円** を見込んでいます。

工業所有権等使用料収益につきましては、アボット社からのロイヤリティ収入が米国での特許切れに伴い減少することから、**30 億円** を見込んでいます。

利益面につきましては、上記のような売り上げの状況に加えまして、費用面の見直しを行いました結果、通期の連結業績は次の通りとなる見通しであります。

<通期業績予測>

	平成18年3月期 (前年同期比)	
売上高	2,690億円	(△ 3.7%)
経常利益	475億円	(△ 18.2%)
当期純利益	340億円	(△ 4.2%)

(3) 事業等のリスク

当社グループの事業展開上、リスクとなる可能性がある主な事項としては、法的規制及び医療政策に係るリスク、医薬品の品質・副作用等に関するリスク、医薬品の開発及び事業化に関するリスク、知的財産権の保護の正否に関するリスク、特許権満了等によるリスク、種々の訴訟リスク、為替変動に関わるリスクがあります。なお、これらのほかにも、他社開発品のライセンス等に依存するリスクなど様々なリスクが存在しており、ここに記載されたリスクが当社グループの全てのリスクを表すものではありません。